

筑紫（九州）の万葉集と風景画シリーズ（第七十六回）

だざいのそち

「大宰帥大伴旅人・従者の歌」

てんぴょう

天平二年（730）庚午（かのえうま）の冬の十一月、大宰

だいなごんま

帥（大宰府長官）大伴旅人が、大納言に任けられて（帥は兼ね

のぼ

たまま）京に上る時、そば勤めの者達は主人・旅人の帰京に先

立って別に海路で京に帰ることになった。そこで遠く危険を

伴う旅路を心配して従者各人が思いを述べて詠んだ歌（十首

のうち九州での歌四首）が次のとおりある。

えんぎしき

なお、平安時代の法令集「延喜式」によると大伴旅人の赴任し

ていた九州・大宰府から京までの行程を「大宰府・行程

上三十七日下十四日。海路卅日」と記されている。

わ せこ

1) 我が背子を 我が松原よ

あ まつばら

みわた

見渡せば 海人娘子ども 玉

あまをとめ

たま

も か み

藻刈る見ゆ

卷十七ー3890

右の一首は、三野連 石守作る。

みのむらじ

いそもり

(解説) 松原から見渡すと海人の少女たちが玉藻を刈っているのが見える。船出する港の松原から見た海上風景。海人娘子たちの賑わいを歌うことを通して船出の地をほめた歌で、行く先の安全を祈っている歌であるとの説がある。

2) 荒津の海 潮干潮満ち 時は
あらつ うみ しほひしほみ とき

あれど いづれの時か 我が
とき

恋ひざらむ
こ

卷十七—3891 作者不詳

(解説) 荒津の海、ここでは、引き潮、満ち潮に決まった時はあるけれども、どんなときでも私があなを恋しく思わないときはない。いつも恋しいと都に残してきた妻のことを思って歌っているのであろう。

①この歌に詠われている「荒津」は滝口弘著「九州万葉」
には玄界灘げんかいなだに面する博多湾最奥の海岸部に位置する現在の福岡市荒戸一帯が古代の荒津で、今も海岸部最先端に荒津の名を残している。

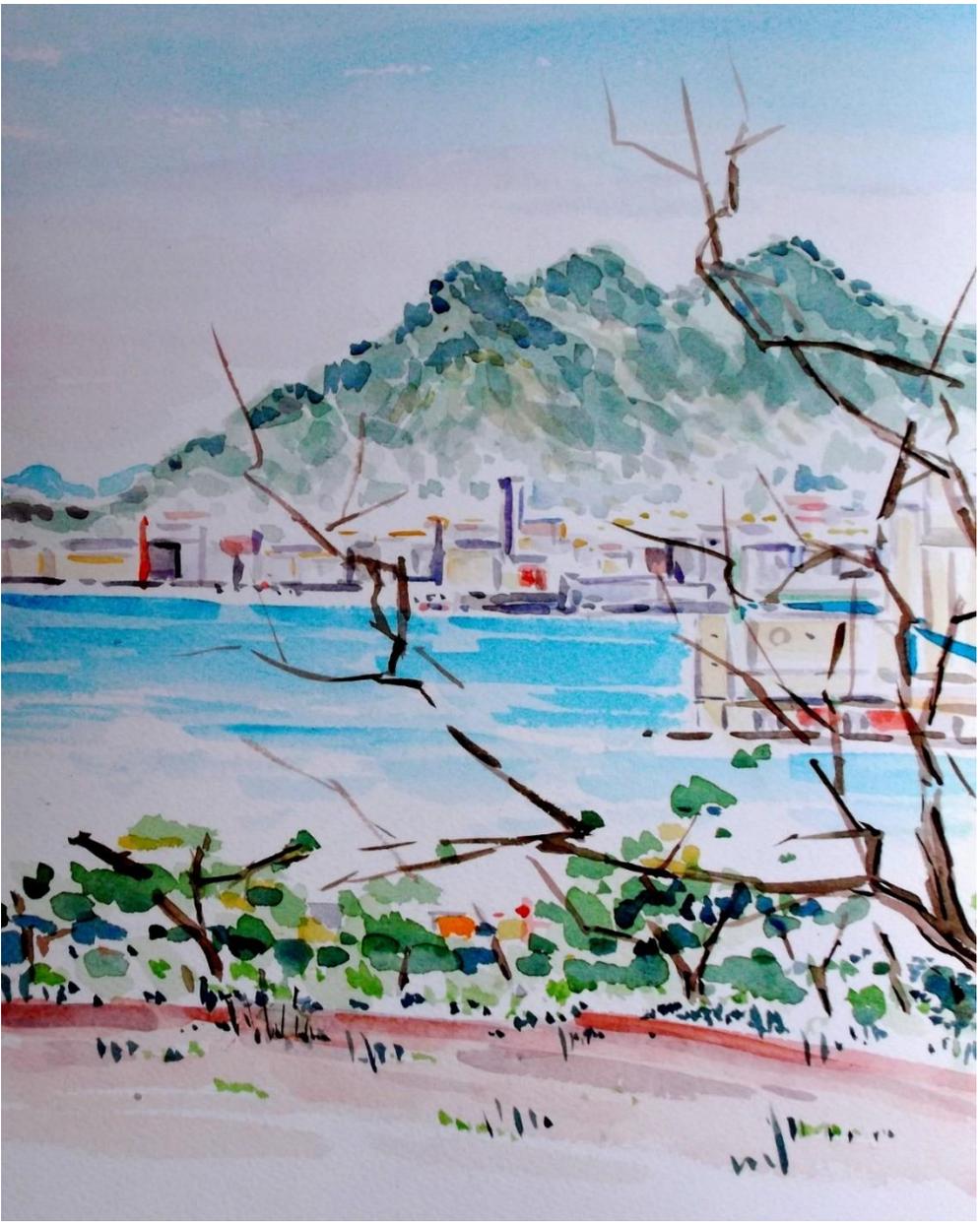
「荒津」は玄界灘の影響を受けて風波の荒い港といげんかいなだう意味であろうと述べる。なお、玄界灘は福岡、佐賀両県の北西部に広がる海で、日本海の一部をいう。

② 古代博多湾の海岸線は、今よりもずっと陸地に入り込み、切れ込みの大きい海岸線をなしていた。今日、福岡市内中心部から博多湾に突き出ている西公園（福岡市中央区）は標高48mの高台で古くから「荒津山」あるいは「荒戸山」と呼ばれ、その突出した先端は古代の「荒津の崎」であり、付近の海面を【荒津の海】と呼ばれていた。

③ なお、古代の荒津の海は西公園（荒津山）の東側にある博多漁港あたりから隣接する西公園の南麓の福岡市荒戸（古代の「荒津」）から南へ約1キロメートル先にある市民の憩いの場である大濠公園（福岡市中央区）あたりまでが博多湾の入り江【古代の荒津の海】で大宰府の外港であった。

（写生地）西公園（古くは荒津山と呼ばれる。）北東側先端部から真下に古代に「荒津の海」と呼ばれた博多湾と対岸に福岡市近郊の山で古くから海陸交通の目印となり、今は九州

百名山の一つに数えられ、登山の山として市民に親しまれている「立花山（標高367m）」などと麓に広がる市街地を描く。
（池田杏花）



3) 磯^{いそ}ごとに 海人^{あま}の釣船^{つりふね} 泊^はて

にけり 我が船泊^はてむ 磯^{いそ}の

し
知らなく

卷十七—3892 作者不詳

(解説) 気付いてみれば漁師の釣舟がことごとく磯に停泊して

いる。しかし、私の船の停泊する磯がどこか分からずに夜の航海において波の上に漂っていなければならぬ不安さを述べた歌だと思われる。

きのう

ふなで

いさな

4) 昨日こそ 船出はせしか 鯨魚

ひぢぎ

なだ

けふみ

取り 比治奇の灘を 今日見

つるかも 卷十七—3893 作者不詳

(解説) 船出したのは、つい昨日のことだと思っていた。なのに、

音に聞こえた比治奇の灘を、はやもう今日は、この目でしかと見た。この歌は当時の船は小さく、航海の技術も進んでいなかったので、船の旅には危険が多かったから、平穏な航海で、船は順調に進んでいることに喜んだ作であらう。

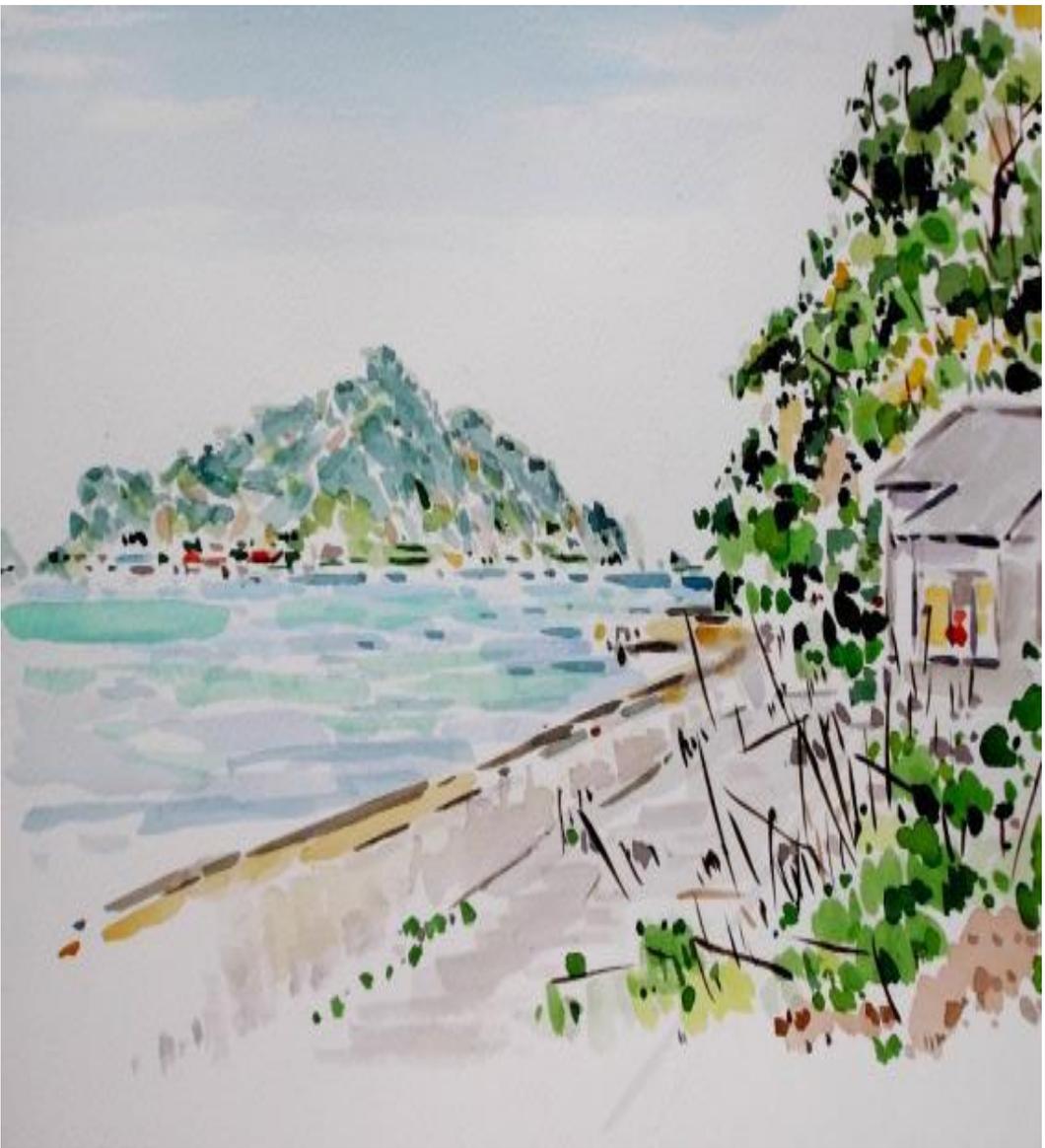
○「比治奇の灘」とは土屋文明著『万葉集私注』等には「ヒ

ヂキの灘は、今の響灘ひびきなだであろう。関門海峡の北西に
広がる海域であり、北東側は日本側に続き、西側には
玄界灘が隣接する。福岡県北部の宗像市鏡崎むなかたしかemakiの北方の
玄界灘に突出している岬「鐘ノ岬」かねのみさきと北西2キロメー
トルの海上にある小島「地ノ島」時間のしまとの間の瀬戸が西に
玄界灘、東に響灘の境にあたる。

(写生地)

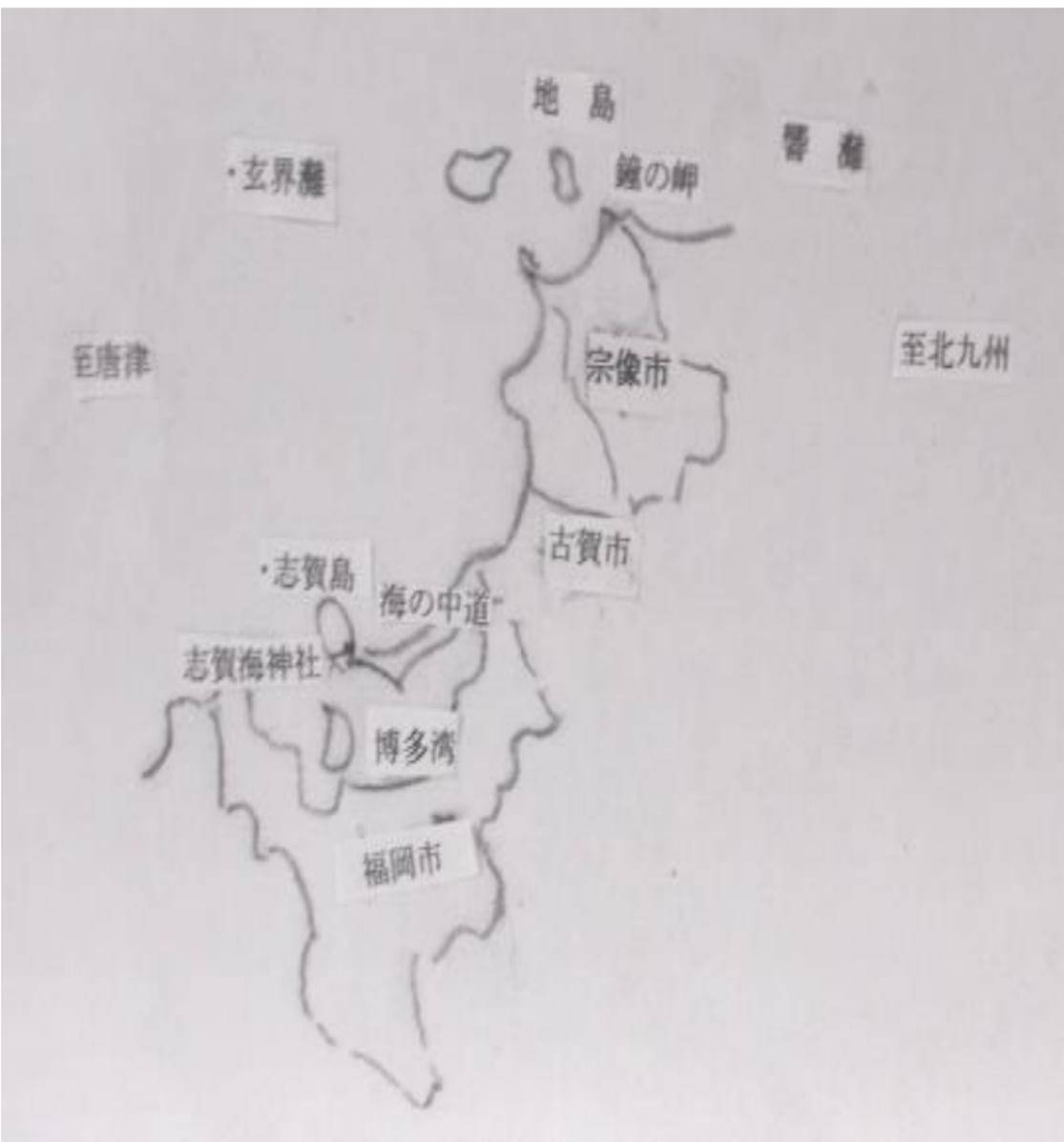
福岡県宗像市鐘崎むなかたしかねざきに鎮座する古社・織幡神社前おりはたから鏡

ノ岬に突き出た織幡山の麓と玄界灘と響灘の境界に
浮かぶ「地ノ島」じのしまを描く。手前は玄界灘。(杏花)



(位置図)

響灘・玄界灘・鏡の岬・地島・博多湾等



(参考文献) 伊藤博著「万葉集釈注」、日本古典文学大系「万葉集」

福田良助著「九州の万葉」等